



お嬢様は
性処理専用
の道具

小説 上田ながの

挿絵 ピエール☆よしお

立ち読み版

序章	幼馴染みが性処理道具!?	006
一章	私は納得してここに来たの!	016
二章	おててとお口で性欲処理	034
三章	お風呂で初エッチ	059
四章	性処理道具の日常	114
五章	私は弘樹専用の性処理道具!	159
六章	……好き♥	186
終章	それから……ただれた生活♥(221

登場人物紹介

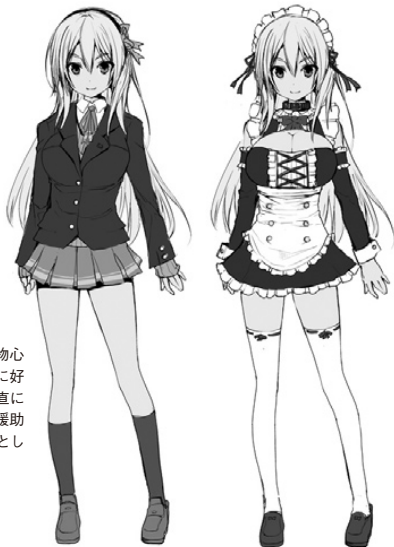
Characters



ひめみやかなで

姫宮 奏

名家姫宮家のお嬢様。弘樹とは物心ついた頃からの付き合いで密かに好意を寄せているが、なかなか素直になれない。没落した姫宮家への援助の見返りとして久住家にメイドとして雇われることに。



くず み ひろ き

久住 弘樹

久住家の跡継ぎで、優柔不断な性格。幼馴染みである奏のことが昔から好きだが、奥手なために気持ちを伝えられないでいる。

くず み じゅう ぞう

久住 重蔵

弘樹の祖父で、やりての実業家。好色な性格で、愛人の数が男のステータスだと思っている。

僅かに緊張した様子を見せながら、股間に手を伸ばしてくる。

「……………」

が、なかなか触れてくれない。

「その……やっぱり止めようか？」

やはりイヤなのかな？

「やや、止めたりなんかしないわよ！ これくらい簡単にできるわよ！ ば、馬鹿にしないでよね」

「だ、誰も馬鹿になんて……って、う、うあつ」

意地になった様子で顔を真っ赤に染めながら手を伸ばしてきた奏に、パジャマズボンの上から股間部に触れられた。ヒクツとそれだけで弘樹の腰は跳ねるように震えてしまう。

「な、何これ——か、かたっ」

既に肉棒はこれ以上ないというくらいに屹立している。驚きの声が奏の口から漏れた。

「何ってその……それが……僕の……」

「……あ、ああ……ぺ、ぺぺ、ペニスね。い、いわれなくても分かてるわよ！ ただその、お、思ったより硬かったから、ちよつと驚いちゃっただけなんだから！ そ、それじゃあ、改めて……」

もう一度股間に手を伸ばしてくる。再び白く、細い指が寝間着の上からではあるけれど

ペニスに触れた。

「くっ」

までも腰が跳ねてしまう。

「これ……ズボンの上からなのに、すごく熱くなつてのが分かるわ……。これってその、わ、私にされることを想像したから……こんなになっちゃってるわけ？」

「う……うん」

否定なんかできない。

「そうなんだ……。な、なんかホント硬くなってるわよ。ちよつと触っただけなのに、こんなにか、硬くしてるの？ あ、あんた、ちよつと興奮しすぎなんじゃないの？ ま、まったく……これだから男は馬鹿でスケベとかっていわれるんじゃないの？」

「その、それは……」

興奮しすぎなのは事実であり、正直返す言葉もない。

「ま、まあ別にいいけどね……。あ、あんたがエロエロだつてことは昔から知ってたわけだし。よくつく、私の胸を見てるしね」

「あ、そ、そそそ、それはっ」

まさか……き、気づかれてた？

でも、だって仕方ないじゃないか。奏の胸……ほ、本当に魅力的だから——つてのは、

きつと言いつにないんだろうな。

「ふふ、なに焦ってるのよ、今更遅いわよ。で……え、えっと、擦ればいいのよね確か。こんな感じ？ どう、か、感じる？」

スリスリスリ……。

焦っているこちらに對し自分が優位になったと考えたのか、微笑みを向けてきたかと思うと、ズボンの上からペニスを擦り上げてくる。

技巧も何もあったものじゃないけれど、優しい手つきでスリスリと性器が刺激された。

「うっ、くっ……か、奏……はあはあ……」

ほんの少し刺激されるだけで、すぐさま息が荒くなる。ゾクリッと背中を駆け抜けるような刺激が走った。ビクッと腰が跳ねてしまう。自然と奏の手に陰部を押しつけるような形になってしまった。

「……な、何よあんた？ ここ……これだけじゃまだ足りないっていうの？ ホント仕方がないやつよね。あ、呆れちゃうわよ……」

どこか恥ずかしそうにしつつも、当然のように悪態を向けてくる。

「ご、ごめん」

「ごめんとかいいながら、ズボンの中ですごくビクビク震えさせてるじゃない。何よ、こうされるのがいいわけ？」

なんてことをいいながら、奏は更に陰部に刺激を与えてきた。

スリッスリッスリッ。

手のひらとズボン生地が擦れ合う音色が響く。なんだかその音が、とてもイヤらしいものに聞こえ、更に弘樹の情欲が刺激された。

衣擦れ音とコチコチという時計の音、そして――

「はあっはあっはあっはあっ……」

「……はあーはあー……」

二人の荒い吐息が室内に響き渡る。

「なんか……最初より大きくなってきたわね」

しばらくすると、顔を赤くした奏が、股間部に触れたままそう呟いてきた。

「これって……か、感じてるから大きくなってるわけ？」

「あ、う……うん」

なんだか恥ずかしいけれど、感じているのは事実であり、うなづく。

「そう……私で感じてるんだ……」

そう呟き、しばらくうつむく。

「か、奏？」

「……ねえ……。ち、直接見てもいい？　なんか……ちよつと興味がわいてきたわ」

僅かに声を震わせながら、こちらを見つめてきた。

「ち、直接って……」

「いいの？ 駄目なの？」

「え、あ……その……。い、いいよ」

それ以外の答えは見つからなかった。

「それじゃあ……その……。ぬ、脱がすわね」

そういうと、奏はパジャマズボンに手をかけ、下ろしてくる。弘樹は少しだけ腰を上げて、その行動をサポートした。そのまま下着も脱がされ――

「お、大きい。こ、これが――おち……べ、ペニス？」

ビヨンッと肉棒が飛び出す。

呼吸するようにゆっくりと^{こめ}肉槍。竿の部分には幾本もの血管が浮かび上がっている。

自分でも驚く程に、肉棒は硬く、熱く屹立していた。

「すごい……」

奏は呆然とペニスを見つめ、ゴクリッと喉を上下させる。

「……あの、だ、大丈夫？ その……い、今更だけど……む、無理しなくていいよ」

肉棒を幼馴染みの前に晒しているという状況。正直これだけで射精してしまいそうなくらいの興奮を覚えた。だが、異様すぎる状況に冷静な心がわずかだけれど戻ってくる。自

「然と氣遣いの言葉が口をついた。」

「本当に今更ね。それに……別に無理なんかしてないわよ。わ、私が見せろっていったんだから、あんたが気にする必要はないの！　だ、第一、こ、この程度何でもないんだから。だからその……これを気持ちよくさせるくらい簡単なんだから！」

返ってきたのは強がりの言葉。同時に手を伸ばし、肉茎を握ってくる。

「ふあああつ」

ペニスを包み込むような刺激が走った。反射的にビクンツと腰が跳ねる。

「あれ？　もしかしてさ、触っただけで感じてるの？　敏感すぎるんじゃない？」

クスツと、赤い顔をした奏が笑う。

「そ、そういわれたって。うつく、ぼ、僕のを奏が触ってるって思ったら……我慢なんかできないよ」

「奏がつて……へ、変なこというんじゃないわよ。べべ、別に私でなくても……だ、誰にやられたって感じるくせに！　ほら、こうされれば誰が相手でも感じるんでしょ？　えつと……確か、その……えつと……」

自信満々だったくせに、急に動きを止めると、ペニスを握ったまま、何度も奏は小首を傾げた。

「どうかしたの？」

「——ど」

「ど？」

「どど、どうすればいいのよ！ こ、ここからどうすればあんたは感じるの？ そ、それを早く教えなさいよ！ や、やり方なんか知らないんだから!!」

何故か怒られてしまった。

「やり方ってえつと……その……し、扱じいてくれればいいんだよ……」

「扱じく？」

「そのこうやって……」

オナニーをする時のようにシコシコと手を動かしてみせる。

「……なんかその手つき……イヤらしいわよ」

「い、イヤらしいって……イヤらしいことなんだからし、仕方ないだろ」

「そそ、それもまあそうね。わ、分かったわ。えつと、こ、こう？」

問いかけるような視線を向けつつ、握ったペニスを扱じいてくる。

「うあつ、そ、それっ！ く、うううう」

途端に性感が走った。自分でするのは比べものにならない程の快感を覚える。ビクッ
ビクッと激しくペニスは反応した。

にちやつ、にちやつ、にちやあ……。

「な、何これ、なんか先から出てきた……」

数度の手淫でしかなかったけれど、すぐさま肉棒の先から半透明の液体が溢れ出し始める。ニチャツと糸を引く程分泌液は濃厚で、奏の指に絡みついた。

「これって……何？ き、気持ち悪いじゃない。と、止めなさいよ！」

「そんなこといわれてもむ、無理だよ。それはその……か、感じると出るものだから」

「感じるとって……お、男でも気持ちよくなると……こ、こうなるんだ……」

「お、男でもって……」

奏の口から出た言葉に、気持ちよくなつてアソコを濡らす幼馴染みの姿を想像してしまい、ドキンツと胸が鳴る。更に肉棒が硬くなつていくのが自分でも分かった。

「ま、また硬くなつた……。これ、本当に感じてみたいね」

興味深そうな表情を浮かべつつ、指先に絡んだ汁をニチャニチャと弄ぶ。もてあそ

その姿がなんだかとても淫靡だった。

「で、でも、これだけで感じるなんてちよつと我慢が足りないんじゃないの？ これならあつという間に終わっちゃうじゃないそうね。ほら、もしかしてもう……すぐにその……で、で、出ちゃいそうじゃないの？ ほら、これでどう？」

ニチャツニチャツニチャツ！

「うっく、あっああああ」

こちらが感じていることになんだか嬉しそうに笑みを浮かべると、更に激しく手を動か
し、ペニスを刺激してきた。

「はあはあはあ……。こんなグチュグチュになるなんて……。ホントあんたってイヤら
しいわね」

奏の手がカウパー液でドロドロとなる。

「……でも、わ、私の手でこうなったのよね……。なんか、ち、ちよつとお、面白いかも」
そう呟きつつ、手淫の速度を上げてくる。

ちゅぐつ、くちゅつ、ぬちゅつぬちゅつぬちゅつ……。

卑猥な音色が室内中に広がっていった。

「……ね、ねえまだその……出ないの？」

ただ、なかなか射精には至らない。数分手扱きが続けた後、どこか不安そうな表情をこ
ちらへと向けてきた。

「う、うん……」

「その、もしかしてあんまり気持ちよくないとか？」

「そんなことないよ」

実際気持ちいい。自分でするよりも何倍も心地よかった。

「じゃあなんで出ないのよ」

「そ、そういわれても……」

ただ、オナニーより気持ちいいのだけれど、やはりどこか奏の手淫は拙く、なかなか射精することができない。

「……ねえ、ど、どうすればいい？」

「どうって？」

「その……だから……ど、どうすればしし、射精できるのかって、聞してるの！」
ギロツと睨み付けられてしまう。

「え、ど、どうって……その……」

思わず弘樹は視線を奏の口へと向けてしまう。手で射精できなければ口——本能でそう考えてしまう自分がいた。

「何よその目……。も、もしかして……く、口でしろってこと？」

「え、あい、いや……別に……」

「このド変態！」

「ご、ごめん……」

怒鳴りつけられ、反射的に謝罪の言葉を口にする。奏が怒るのも無理はない。

「……別に謝る必要はないわよ」

しかし、それ以上の怒りが飛んでくることはなかった。怒るところか、何かを考え込む

様な表情を浮かべる。

「……奏？」

その姿に小首を傾げると、

「ねえ……く、口でしたらその……手でするより気持ちいいの？」

なんて言葉が返ってきた。

「え……あ……その……うん」

口でされたことなどないから、手より気持ちいいかなんてことは知らないのだけれど、気がつけばうなずいていた。

「……わ、分かったわ。そ、それじゃあ……く、口で啜^{くわ}えてあげる」

「で、でも……」

「私がしてあげるっていつてるんだから、遠慮なんかするんじゃないわよ！ いいいい、行くわよ!!」

弘樹の気遣いを途中で遮^{さえぎ}り、んあつと口を開くと、躊躇^{ちゆうちよ}なく肉棒を啜^{くわ}えてきた。

「んっく、ふ、ふむう。これ、お、おおひい」

生温かな口腔の感触が肉棒を包み込んでいく。

「うくっ、あ、あああああ」

初めて感じる柔らかな肉の感触に、気がつけば熱い吐息を漏らしていた。

「んじゅっ……んっんもっ、もっふ……ふはあっ……はあっはあっはあっ……ど、どう？
こ、こんな感じで、その……手でするみたいに口で扱けばいいのよね？ 気持ちいい？
感じた？」

「うん。それでいいよ。き、気持ちいい。感じるよ……」

「そう……それじゃあ……むっふ、んもっ……もふう……」

じゅぽっじゅぽっじゅぽっ。

再び肉棒を咥える。口唇を窄めて顔を前後に振ってきた。

「う、うあっ！ それ、それいいよ。き、気持ちいい」

すぐさま弘樹は快楽を口に出す。それを証明するように、口腔で肉棒が震えた。

「んふふ。はふう……はあはあ……ほ、本当に感じてみたいね。ふふ、それじゃあ、も
っと気持ちよくしてあげるわ。えっと……んむっ、はむう……」

唇を肉棒に絡みつかせてくる。キュウツと口で締め付けられると、ゾクツとする様な性
感が走った。

「ふっむ……むふっ……はふっはふっ……んっんっんもお……」

ぎこちないながらも顔を前後に振り、より激しく肉棒に刺激を与えてくる。

「く、あっ、そ、それ、い、いいよ」

「はあはあ……き、気持ちよさそうね。他には……な、何をすればいい？ ど、どうすれ

ばもつと気持ちよくなれるかしら？」

「どうってその……し、舌を使って舐めてもらってもいいかな？」

「舌？ えっと、こ、こう？ むっ、ふむっ……はふう……」

ちゅるっ。れろれろ、くちゅっ、れろちゅう……。

素直に従い、口唇で肉竿を扱きつつ、舌を動かして亀頭を舐めてきた。ペロンペロンッ
とまるでアイスでも舐めるみたいに、舌を激しく動かしてくる。

「うっく、あっあっあっ」

手淫と同じで技巧などまるでない。けれども口腔の熱さ、舌の柔らかさを感じているだけで、下半身が蕩けてしまいそうなくらい感じてしまっていた。

ちゅっぶ、くちゅっ、ちゅぶっちゅぶっちゅぶっちゅぶっ……。

「んっく、はああああ……。これすごく大きくなってる。ふふ、感じてるんだ。わ、私で
気持ちよくなってるのね……。いいわ、もつと気持ちよくしてあげる。んっふ、んん
んっんっんっんん」

舌で亀頭の先端部分をなぞられ、蠢く舌で溢れ出す牡汁を掬め捕られる。

ペニスは熱を持ち、膨張していく。肉竿は最初に奏の手で握られた時よりも、一回り以
上は大きくなっていた。

下腹部から熱い性感がわき上がってくる。



「う……嘘？」

「どジャアアア……ん！　どうよ！」

テーブルの上にパスタが置かれる。

「まさか、ホントに奏が料理を？」

「ふふふ、さあ、食べてみなさい」

「あ、い……いただきます……」

恐る恐るパスタを口に運んで食べる。

「お、美味しい……まさか？　ホントに？」

「それでもパスタは得意なのよね！　どう？　実力の違い……思い知ったかしら？」

「う、た、確かに……僕の負けだ……」

ガクッと肩を落とす。

「ふふりん。あんたってホント何をやらせても駄目よね。いいわ。こうなったら私がこれから夕食を作ってあげる。感謝なさい！　まあ、パスタしか作れないから毎晩パスタになるけど、構わないわよね？」

ドヤアッと胸を張る。

「あ……えつと……ゆ、夕食は交代制にしようか……」

「ええ、しよっぱいパスタしか作れないあんたと交代制？」

実に不満そうである。

「でも、まあそれでいいわ。私があんたの為に料理なんて、おかしいもんね。まあせいぜい私の為に美味しいものを作りなさい！」

本当に偉そうである。そこがまあらしいといえbraしいのだが……。

（ちよつと腹立つことは事実だしなあ。何とかぎゃふんといわせてやれないものか……）
腕を組み、うーんと考え込む。

「何うんうん唸ってるのよ。ちよつとキモいわよ。つて、まあいいか、私……先に風呂に入らせてもらうわね」

（ん？ お風呂？ そ、そうかつ!!）

そこで思いつく。少しだけ奏を困らせてやろう。

「ちよつと待ってよ」

「ん？ 何よ」

「……別に何ってわけじゃないけど、お風呂入るなら、僕も一緒に入っていいかな？ 僕の身体を洗ってよ」

本心からの言葉というわけではない。目的はあくまでも小生意気な幼馴染みを困らせてやることにあった。

（どうせこの「ヘンタイ！」とかいって一緒に入ってくれるわけなんかないけどね）

我ながら実に子供っぽい悪戯だとは思ったが、ほんの少しでも奏が恥ずかしがったり動揺する姿を見てやりたい。

なんてことを考えていたのだが――

「……分かったわ。いいわよ」

「――へ？」

返ってきたのは想定外の返事だった。

*

（どどど、どうして？　なんでこうなった？）

風呂場にて、風呂椅子に全裸で腰をかけながらひたすら首をひねる。奏からの返事がありに自然すぎて、結局流されるがままにこんな事態になってしまった。やっぱりこれは拙いのではないのだろうか？

（き、昨日性欲に流されたことを反省したばかりだろ！　や、やっぱり断ろう）
なんて決意をしたタイミングで、ガラガラッと音を立てて浴室の引き戸が開かれる。

「あ、か、奏……」

入ってきたのはもちろん奏だ。

しかも何故か裸にエプロンだけを身に着けている。

白い肌が視界に映った。手のひらでは収まりそうにない程の巨乳が、エプロンの締め付

けで潰れている様に見える。肉が横にはみ出してゐる様が生々しい。カップ数がどれくらいなんてことは正直よく分からないが、まず間違いなくそこらのグラビアモデルより大きいだろう。

そうしてムチツと膨らむ胸元から腰にかけて艶めかしい曲線が描かれる。大きな乳房にもかかわらず、ウエストはモデルの様に引き締まっていた。

（やっぱりすぐスタイルがいい……。見てるだけで、なんだか熱くなつてきちゃうよ……）
更にエプロンから肉付きのいい太ももが覗き見える。脚の付け根の部分——秘部は上手い具合にエプロンで隠されていた。どうしてもそこに意識が集中してしまう。

（奏の大事なところ……）

あのエプロンの下には、奏の女としての部分が——。

想像だけでゴクリッと思わず喉を鳴らしてしまう自分がいた。

「あ、あんまり見るんじゃないわよ。また変態つて罵られたいわけ？」

「ごご、ごめん！」

怒られてしまったので慌てて視線をそらす。するとクスクスと奏は笑みを漏らした。

「って、別にそんなに焦る必要はないわよ。私はあんたの性処理道具なのよ。い、いく……いくらでもみみ、見たっていいわよ。その、い、一応エプロンも着けてるしね」

余計にエロいです。

「いや、だ、だけど……その……」

「ま、まあ……そ、そういうところがあんならしいけどね」

なんてことをいいながら、こちらの背後まで近づいてきた。

「それじゃあ、あんたの身体を洗ってあげるわね」

耳元でそつと囁かれる。聞き慣れた声のはずなのに、なんだかとてもゾクゾクした。

「あ、いや……だ、だけど、ほ、本当に？」

「……当たり前よ。これがその……私の仕事なんだから。身体を洗えって、そういうことなんでしょ？」

「う、うあ、別にそういうわけじゃ……」

奏の行動意図がさっぱり分からず動揺してしまう。

「う……嘘なんかつかなくていいわよ。じゃあい、いくわね」

手を伸ばし、シャワーを手取る。この時、背中に乳房が当たった。押しつけられるような形になり、エプロン下の柔らかな感触が伝わってくる。

「う、うああつ、ちよつ、あ、当たってる。当たってるって」

まるでマシユマロみたいなどても心地いい感触が、弘樹の興奮を更に煽り立ててきた。下半身が熱を持ち、むくむくとペニスが大きさを増してしまう。

（駄目だ。鎮まれ、しずまれいっ!!）

必死に自分に言い聞かせる。が、こればかりは意思の力ではどうしようもない。すぐさまペニスは硬く、熱く屹立してしまった。

「……また……随分硬くしてるみたいね。そんなに私とその……したかったの？」

背後から覗き込んでくる。さらっとした髪が肩に触れるのがくすぐったかった。当然のようにより再び乳房が押しつけられる。

密着するエプロンと肌。背中に温かい奏の体温が伝わってくるのを感じた。

まだ湯船にもつかっていないというのに、のぼせそうなくらいに頭がくらくらする。いつぶっ倒れてしまってもおかしくない状況だった。

「も、もういいよ。その……か、身体洗ってっていったのは、その……じ、冗談だったんだ。だから、こ、こんなことしないでいいから」

とにかくこのままでは、理性を保てそうにない。逃げる為に立ち上がろうとする。が、それより早く奏が動きだし、ギューウツと背中から抱きしめられてしまった。これまで以上に肌が密着する。

「か、奏？」

「……べ……別に、じ、冗談とかそんなの、ど、どうでもいいのよ！」

「え？ どうでもいいって……で、でもっ」

「でもも何もないわよ！ 私はあんたの性処理道具。だからあんたをすつきりさせるのが

仕事なの！ その……う、ウチを助けてもらった分は、しつかり働かないとい、いけないでしょ！」

「いや、だけど……」

「だけでもなにもない!! じつとしてなさい。これから綺麗に洗ってあげるから！」
ギランツと奏は瞳を光らせ、睨み付けてくる。

「は、はいっ」

こんな視線を向けられてしまったら、もう逆らうことなんかできるはずがなく、素直にうなづくことしかできなかった。

「よしよし、そうして素直にいうこと聞けばいいのよ。それじゃあ……い、いくわね」
なんてことをいいながら、グチュグチュとボディソープを泡立てると、それを自分自身の身体に塗りたくり始める。

「え？ あ、そ、それ……な、何やってるの？」

「何って……私の身体を使ってあんたの身体を洗ってあげるのよ」

「わ、私の身体って……」

つまりそれってふ、風俗みたいにするっていうこと？

「そうされると男って嬉しいんでしょ？ 違うの？」

「え？ あ、いや……ち、違うなんてことはないけど……」

思わず振り返り、泡に塗れた奏の胸を見てしまう。白い泡に塗れた柔らかな乳房。エプロンの乳頭部がポチッと膨らんでいる。その豊かな肢体で身体を洗われるなんてことを考えるだけで、より肉棒が熱くたぎってしまう。ゴクリッと息を呑んだ。

「ほら、嬉しいんじゃない」

「そ、それはその……そ、そうだけど、でも、ど、どこでそんなこと覚えてきたの？」

「どこって、素子が教えてくれたのよ」

「素子って……み、宮前さんか」

いつそんな話をつて、今日しかないか。

それにしても、性知識なんてほとんどない奏にいきなりなんてことを教えるんだ。今度遠回しに注意しておかないといけない気がする。

「って、別に素子のことはいいでしょ。じ、準備できたしくわよ」

「じゅ、準備つて、ちょ、ま、待つて——ふ、ふあああ」

ぬちゃああつ。

慌てて止めようとしたけれど、奏はこちらの言葉なんか聞いてはくれなかった。再び背中に柔らかな感触が押しつけられ、反射的に情けない悲鳴を上げてしまう。

「へ、変な声上げないでよ。笑っちゃうじゃない」

「ごめん。だ、だけど……」

「ただ何？ 私……む、胸の感触がそんなに気持ちよかったの？」

「それはその……」

確かにその通りだけど、あつさり認めるなんて恥ずかしい真似はできない。

「はつきりいいなさいよ。こ、こうされるのが気持ちいいんでしょ？」

ぬちやつぬちやつぬちやつ。

そういうなり奏は上半身を動かし始める。エプロン下の乳房と背中が擦れ合う淫らな音色が、浴室内に響き渡った。

「う、うあつ！ あつくう。そ、それ、だ、駄目だよ」

ゾクゾクツとした性感が走る。抑えることができず、再び情けない悲鳴を漏らしてしまった。

「やつぱり感じてる。ふふ、こうやって擦られるのがいいんだ。ほら、こう？ こういうのがいいの？ んっ。んっんっんっんっんっ」

ぐちゅっぐちゅっぐちゅっぐちゅっぐちゅっ。

こちらの反応に対し、勝ち誇ったような笑みを口元に浮かべると、より強く身体を密着させてくる。

伝わってくる肢体の感触は本当に柔らかく、擦られているだけなのに身体が蕩けてしまうのではないかとさえ思えるほどだった。身体と身体が一つに混ざり合っていくようにさ



を感じる。

「ほら、素直になりなさい。どう？　はあはあ……気持ちいいんですよ？」

耳元に熱い吐息混じりの声が向けられる。脳髓にまで響き渡るような、甘い囁きだ。耳にするだけで全身から力が抜けていく。理性が溶けてしまいそうだった。

「こんなこともしてあげるわよ」

泡に塗れた腕を伸ばし、こちらの身体を抱きしめてきたかと思うと、そのまま胸板を手のひらや指先でなぞり始める。

「背中だけじゃなくて……んっんふっ……ま、前も綺麗にしないとね」

蠢く細指で肌をなぞられるたびに、ビクッビクッと反応してしまう肉体を抑えることができなかった。

胸を転がすように指で刺激されると、

「うあっ、ああっ」

なんて愛撫される女性のような悲鳴まで漏れ出てしまう。

「ほら、いいでしょ？　私に身体を洗われて、感じちゃってるんですよ？」

これ以上我慢なんかできそうにない。

「う、うう……き、気持ちいい。気持ちいいよ」

気がつけば快楽を口にしてしまっていた。

「ふふ、そうそう。はじめからそうやって素直になっておけばよかったのよ。でも、ふふ、そっか、気持ちいいか……」

口元をほころばせる。正面タイルに貼り付けられた鏡に映る表情は、なんだか優しい。心の底から喜んでいるようにも見える。あまり見たことのない表情だった。

「か、奏？ ど、どうかしたの？」

「——へ？ ベベ、別に何でもないわよ。それよりほら、も、もっと気持ちよくしてあげるから、ありがたく思いなさい」

「もつと？ な、何を——ふえええっ!？」

ぬちめるう。

一度背中から離れていったかと思うと、今度は弘樹の右腕を取り、二の腕のあたりをエプロン下の乳房で挟み込んだ。

「んっく、はああああ……。どう、私の胸は。気持ちいい？」

挑発するように上目遣いでこちらを見つめてくる。

（うああ、し、沈む。ぽ、僕の腕が胸に……奏のおっぱいに沈んでいく。これ、や、柔らかい。こんなにかいなんて）

腕に感じる乳房の感触は想像していた以上だった。腕を挟まれているだけだというのに、全身から力が抜けそうになる。

だが、ここで絶頂くわけにはいかない。自分だけが気持ちよくなるのでは駄目なのだ。奏も気持ちよくさせてあげたい。一緒に絶頂きたい。

「い、痛くない？」

「……痛いわけ……ないじゃない。その……、き、気持ち……いいわよ」

「動いてもいい」

「もちろんよ。わ、私はあんたの性処理道具なのよ。弘樹がす、好きなようにすればいいの。だからう、動いて……はあはあ……いいわよ」

「分かった。それじゃあいくね」

膣奥まで突き込んでいた肉棒を引き抜いていく。

「はにゃあつ。う、動いてる。おちんちんが膣中で動いて——くっひ、あひいつ！」

引き抜き動きに合わせて、ヒダヒダがカリ首に絡みついてきた。柔らかな膣肉で肉竿が撫で上げられる。意識が飛びそうになるほどの性感を覚えつつ、引き抜いた肉棒を今度は膣奥にまで挿し込んだ。

どじゅっ！

「また奥まで！ くっふ、んんんん」

膣奥に龟头でキスをする。そのままジュブツジュブツとピストン運動を開始した。

ギシッギシッギシッギシッギシッ！

ベッドを軋ませながら、蜜壺をペニスで犯す。自分自身の存在を奏の肉体に刻みつけるように、腰を振った。

「あつ、あつあつあつあつあつ」

根元までペニスを挿入するたびに、断続的に嬌声上がる。奏が喘ぐたび、膣壁が収縮し、ペニスが激しく締め上げられた。肉棒が膣中に溶けていくような錯覚を覚える。

「奏の膣中気持ちいいよ。ぬるぬるって絡みついてきて、溶けちゃいそうだ。奏も、奏も気持ちいい？」

「んあつ、あつ、ふつく……い、いいわよ。き、気持ちいい。あんたのおちんちんでズンズンッてされると、頭の中が真っ白になりそう」

ふにやあつと表情が蕩けた。

「い、いい……。す、すごくいい。って、さつきもき、気持ちいいって、い、いったじゃない。んあつ、はんん。わざわざまた聞いたりするんじゃないわよ！ こ、この変態！」
口元を緩め、突き込みに合わせてブルンッブルンッと巨乳を揺らしながらも罵ってくる姿が、とても奏らしくて可愛らしい。

「ごめん奏。でも、奏が気持ちいいってしてくれると嬉しいよ。だから、もつと、もつともつともつと気持ちよくしてあげるね」

「もつとつて——ふっひ！ あつあつく、そ、そつれ、ひっひっひあああ。くっふ、はふ

う……す、すごい！ は、激しい、そ、それ、激しい♡」

よりピストン速度を上げていく。肢体を肉槍で刺し貫こうとするかのような勢いで、腰を振った。

どじゅっ！ ぐっじゅ、じゅっぽじゅっぽじゅっぽ、ぶじゅるるるうつ！

「ふっひあ！ た、叩いてる。おっく、私の奥をおちんちんが叩いてる。あっあっあっ、な、膣中——おま〇がおちんちんでかき混ぜられてる！ な、なにこれ、こつれ、き、気持ちいい。お、奥叩かれるのすごくいい♡ こんな、こんなっの我慢できない。私も、私も溶けちゃいそうになる♡」

上がる嬌声を肯定するように、膣中からより愛液が溢れ出し始める。愉悦によつて溢れ出した汁は、白く濁っていた。ドジュッという突き込みに合わせ、巨乳を揺らしながら、分泌液をビュッビュッと膣外に飛び散らせる。それと共に発酵したチーズにも似た発情臭が、室内いっぱいに広がっていった。

「はげっし、激しすぎる。これ、んんん。駄目よ。や、やめって、止めなさい。こんなの、こんなの私、お、おかしくなっちゃうから。壊れる。こんなにつ、突かれたら、わ、私——わつたしが私でなくなっちゃうからあ！」

「いいよ。おかしくなっていない。だから、もつと気持ちよくなつて。もつと、もつともつともつともつともつと！」

訴えに従って動きを緩めるつもりなんかさらさらない。それどころか、よりピストンを激しいものへと変えていく。

（もっと、もっと気持ちよくさせたい。もっと感じて奏！）

自分のペニスで涙を流しそうなくらいに腫を潤ませ、膣壁を痙攣させながら奏が感じてくれている。これほど嬉しいことはなかった。

「あつふ、ふひつ、んひいいい！ や、止めてって、止めてっていつてるのにい。な、な、んで止めないのよ。んっく、なんでもっと激しくなるのよ。あつあつあつ、お、大きく、大きくなつてりゅう！」

「だって、いいから、奏の膣中がいいから！」

「わったし、わらひの膣中——おま○これ、おちんちん、ちんぽがおおひくなってる!! 広がる。わたひのおま○こが弘樹のちんぽれひろげられりゅ。こ、こりえ、こりえいりようされたら、ほんろに、わらひ、いっひゃう。いっひゃうからあ」

膨張した肉茎が膣壁を拡張していく。その感覚がより奏に快楽を与えているようだった。遂に幼馴染みは絶頂を口にする。

「い、いいよ。絶頂っていいよ。絶頂って、僕に奏が気持ちよくなるところを見せて!!」

そんな言葉を告げられて、動きを止めることなどできるはずがない。

ずじゅぶっ！ ずじゅぶっずじゅぶっずじゅぶっずじゅぶっずじゅぶっ！

「あっひ、はひああああ！　な、なんつでよ、ら、らから、らめっていつへるのに、にゃんれ、にゃんれもっろ動きを激しくしゅるのよお。むっり、ほんろに、ほんろにいきゅ、いつひやう、いつひやうのお」

ぎゅちゅうつと蜜壺が収縮し、ペニスを締め上げる。これだけで射精してしまいそうだったが、その快感を必死に抑え込み、ひたすら腰を振って振って振って振って、振り続けた。蕩けそうになる下半身。

（気持ちいい。これ、よすぎて、僕のアソコが奏の膣中に溶けちゃってるみたいだ）

それでも本能のままにピストンを続け――

ずじゅっ！

「――ひあっ♡」

とどめとばかりにこれまでで最大の突き込みを子宮口にぶつけた。

「あ、こ、こつれ、無理。も、もう無理。あっあっあっあっあっ、い、いぎゅっ、わ、わらひ、わらひいぎゅっ♡　来ちゃう♡　きひやうううう♡」

瞬間、奏の肉壁がペニスを食い千切ろうとするかの様な勢いで収縮してくる。襖の一枚一枚が肉竿に絡みつきながら、激しく締め上げてきた。全身が淫肉に包み込まれているかの様な錯覚さえ覚える。

「くっ、駄目だ。で、射精るっ！」

この締め付けに耐えられるはずもなく――

どびゅっ！ どびゅっどびゅっどびゅっどびゅっどびゅるるるっ！！

激しくペニスを脈動させ、多量の白濁液を撃ち放った。

「動いてる。ビクビクッて震えてりゅ。ちんぼの震えが伝わってくりゅう。あつ、んんん。うっそ、これ、わ、私――わたっひ、絶頂くっ♡ 絶頂くっ絶頂くっ絶頂くう♡ いぎゅのおお♡♡♡」

肉棒の律動が膣壁を通じて奏へと性感を与える。それが敏感になった肢体を絶頂へと押し上げた。

「んっく、ふんんんん」

彼女の手が背中に回され、ギュウツと力強く抱きしめられる。肌に爪が立てられ、少し痛かったが、その痛みが心地よかった。

「んっちゅ、ふちゅっ、むっちゅ、むっむっむふううう♡」

その状態で奏の方から唇を近づけて、口付けしてくる。ビクッビクツと二人で快感に身を震わせながら、ひたすら唇を貪り合った。

くちゅっ、ぬちゅっ、ちゅぱちゅぱ、ぬちゅるう。じゅぷっ、にゅちゅう。

そうしてひたすら口付けを続けていると、きゅうきゅうと再び蜜壺が収縮を始め、挿入したままの肉棒を締め付け始める。するとこれにペニスは敏感に反応し、ムクムクと屹立

し始めた。

「ま、また……んっふ、ふちゅ……また大きくなってきた。はあはあ……こ、こんなにわ、私を犯しておいて、ま、まだ足りないなんて……ほ、ほんと、あ、あんたってどこまでエロいわけ？」

「はああああ……。ご、ごめんね」

「だから……あ、謝らなくてもいいの。べ、別に怒ってるわけじゃないんだから。その、いいわよ。したいなら、しなさい。それが私のし、仕事なんだから……」

「……ありがとう。するね」

そういつて一度ペニスを引き抜き、コンドームを外し、新しいものと交換しようとしたのだが――

「あ……し、しまった」

「どうしたのよ」

「……ご、ゴムがない……」

そこでコンドームがきれてしまっていることに気づいた。

「……………馬鹿」

ギロツと据わった瞳で睨まれてしまう。

「ごめん」

「謝らなくていいっていうの何度目だっけ？」

「だけど……」

「気にする必要なんかいいわ！」

そういうと奏は起き上がり、これまでとは逆に弘樹をベッドの上に押し倒してきた。

「か、奏？」

「ゴムがないならこのままするわよ」

「でも……」

「私はあなたの性処理道具なの。だから、問題な——んんんんん。いのっ！」

ずにゆっ、じゅぶ、ぐじゅるるる……。

一切の躊躇をせず、騎乗位状態で生のまま肉棒を挿入していく。

「うあああ。絡みつく。奏が僕に絡みついてくる。くっふ、これ駄目だ。我慢できないよ。」

すぐに、すぐに射精ちやう。射精ちやうからあ」

ゴムを着けて挿入した時以上の性感が走った。褌の一枚一枚が肉竿に吸い付いてくる。

柔らかな肉でギュウツと挟み込まれると、それだけで精液が搾り取られそうだった。

ゴムなしでの挿入。それだけで胸がドクドクと脈打つ。このまま射精せば奏と自分の間

に子供が——

「……………いい、いいわよ。だ、射精していいわ。んっんっんんん。熱い。さつき挿入れ

「くっひ、す、すごっひ、は、はげっし、そつれ、それしゅっごひ、しゅごしゅぎる。ふひゅっ、あひあつ、ひっひっひあああ。そつれ、い、いきしよう、ちゅかれるたびに、い、いきしようになりゅう♥ きつもひ、きもひいい！ おひんひんきもひいいのお♥」

この言葉を証明する様に、ピストンのたびに締め付けがきつくなる。腰を振るたびに、射精衝動が膨れあがっていくのを感じた。

「すっごひ、お、おおきつく、おおきくなりゅう♥ おひんひん、動くたびにおっおき、くなくてくっりゅう♥ いい、いい♥ いいのお♥ もっと、もっともっともっと、つ、つひて、もつろわらひのおきゅまれ挿入れてえ♥」

巨乳が激しく揺れ動くのもいとわず、まるで女を犯す男の様な激しさで腰を振ってきた。二人の腰と腰がぶつかり合う。ドジュッドジュツと腰と腰がぶつかり合うたび、愛液が周囲に飛び散った。

破裂しそうな程に肉棒が膨れあがっていく。

「びくびくっつて、わ、わたっひのなかれ、ちんっちゃんが、ふ、ふるえってる。あつく、むっひ、で、でしようなの？ しえーしでひゃいしようなの？」

「で、射精る！ 射精るよ！ 射精ちやうよ!!」

「い、いひわ。だ、だひて——膣中に、わったひの、おま○こにだっして。ひろっきのを、た、たくっさん。たくさん、わ、わらっひの、はっひはっひはひいい……なっか、膣中に、

膣中に射精してえ♥」

言葉だけじゃない。膣壁までも射精を求めて絡みついてくる。

「うああああ、で、射精るっ！ もう、もう——で、でるうう!!」

肉棒だけでなく、全身を奏に包まれているような快感を覚えながら——

どびゅっ！ どびゅっどびゅっどびゅっどびゅっどびゅっどびゅるるるっ!!

熱液を解放した。肉茎を震わせながら、大量の熱液を奏の膣中に流し込んでいく。

「あんん！ あっつ、熱い！ こっれ、射精てる！ わ、私の膣中でれてる。精液がた
くさん、たくしゃんながれこんれくりゅっ！ あ、しゅ、しゅごい、びくびくが、さつき
よりもちゅたわつてくりゅ。あ、あっあっあっあっあっ、こっれ、これ、き、気持ちいい！
おま○こ精液でいっぱひにしゃれるの、きもひいい♥」

瞳を見開きながら、肉悦に奏は溺れる。

「沁みる。私のしきゅーに、弘樹の精液が沁み込んでくりゅ♥ あっあっあっ、熱い。お

ま○こ熱い。おま○こやけろしちやいそう。れも、いい。これがいいのお♥ ああ、い、
絶頂くっ！ また、また絶頂く♥ 弘樹のせーえきれいきゅのお♥」

ビクンッビクンッビクンッ——壊れたおもちゃみたいに奏は痙攣した。だらしなく口を
開き、切なげに眉根を寄せる。身体中から汗を垂れ流しつつ、プシャアッと結合部からは
白濁液混じりの愛液を飛び散らせた。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

竹内けん

Takentí Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)



特設サイトはこちらからアクセス!!



<http://ktcom.jp/harem/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ？



詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて！

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトに続々配信中!!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!